

東港金属株式会社

東京都大田区京浜島2-20-4

電話 03-3790-1751

URL <http://www.tokometal.co.jp>

(見学受付)

電話03-3790-1751 又は 各営業担当



### ★羅針盤

鉄スクラップ

考察) 鉄に関しては、結果として東鉄宇都宮が、1,000円/トン上がった位で3月は動きはほとんどありませんでした。4月に関しては、輸出向け、電炉共に下げると考えられます。

銅

考察) 3月LME価格は7,800ドル/トンでスタートしたものの、国内銅建値がいきなり20,000円/トン下げの760,000円/トンでスタート。その後、円安の影響もあり、中旬で790,000円/トンまで上がりましたが後半以降下げ続け最終的には、LME7,580ドル/トン、銅建値760,000円/トンまで下がりました。

アルミ

考察) 上物は、すでに下げの兆しが出てきています。3月は、LME2,000ドル/トンでスタートしたものの、最終的には、1,900ドル/トンを割り込み、裾物まで下がっています。4月は、間違いなく下がります。

プラスチック

考察) 多少であるが上向きです。ペットボトルも立ち直ったようです。しかし、中国輸出は、相変わらず検収が厳しいようです。香港経由で出荷する業者が多いようです。4月は横ばいでしょう。

#### 3月予測の自己評価

鉄スクラップ	×	アルミ	×
銅	○	プラスチック	○

## 鉄・非鉄スクラップ・市況からの3月予測

営業部 Y の考察

東港金属株式会社は非鉄・スクラップの買取り、産業廃棄物の処理をお受けいたします。身近なリサイクルパートナーとしてお気軽にご相談ください。



### ★羅針盤

## 産廃の処理責任と委託契約について

産廃の処理責任は、「アンタが出した産廃は、アンタが最後までチャント片づけなさいヨ」というスタンスから産廃の処理の責任の考え方がスタートします。

廃棄物処理法の第3条で「事業者は、その事業活動に伴って生じた廃棄物を自らの責任において適正に処理しなければならない」、そして更に第11条で「事業者は、その産業廃棄物を自ら処理しなければならない」としております。

とは言え、「自分でチャント処理することが難しかったら、チャント処理できる人に頼んでも良いですヨ」とその処理を委託しても良いとしております。

でも「チャント処理できる人とは、どんな人なの？」という問いに対しては、チャントできる人を法で決めており、その人が産廃の収集運搬業者であり産廃の処分業者なのです。

法では第12条の第5項で「事業者は、その産業廃棄物の運搬又は処分を他人に委託する場合には、その運搬については第14条第12項に規定する産業廃棄物収集運搬業者その他環境省令で定める者に、その処分については同項に規定する産業廃棄物処分業者その他環境省令で定める者にそれぞれ委託しなければならない」とし、法第14条第12項で「産廃の収集運搬業者又は産廃の処分業者は産廃処理基準に従い、産廃の収集若しくは運搬又は処分を行わなければならない。」と定めております。産廃処理基準を守れる人(即ちチャントした人)かどうかは審査を受けた結果で決まります。

では「自分の工場からでた産廃の処理を委託するには、どうすれば良いのでしょうか？」

答えは、産廃を出す人が、それを運ぶ資格のある産廃収集運搬業者と、それを処分できる資格のある産廃処分業者と、夫々別々に廃棄物処理法の施行規則に基づいた委託契約を書面で結ぶことから始まります。そしてその契約書は処理が終了した日から5年間の保管が義務付けられていますのでご注意ください。

また、処理を依頼した後でも目の前から産廃が消えたので、もう産廃がどうなるかと関係が無いと思っははいけませんヨ。何故なら「アンタが出した産廃は、アンタが最後までチャント片づけなさい」ですから、産廃の処理がチャント終わるまでアンタの責任なのです。ですから本当にチャントした業者を選んで処理を委託してください。

チャントした業者をどの様を選ぶかは、廃棄物処理法に基づいた「優良産廃処理業者認定制度」や東京都の「産廃エキスパート・産廃プロフェッショナル制度」の認定業者などが参考になるのではないのでしょうか。



### 私の野球人生

(第3回)

今回は、野球人生の中で大事な中学生時代をお話しさせていただきます。

私は、調布リトルリーグを卒団後、すぐにその兄貴分の調布シニアリーグに入団しました。小学生のリトルリーグとは違い、シニアリーグのベース間距離はプロ野球と同じで、ここで本格的な野球のスタートラインに立ちました。

当時のシニアリーグの練習場は、多摩川の河川敷だったので授業終了後、直ぐ電車に乗り、練習場の最寄駅である京王多摩川駅まで通う毎日でした。

練習は、ランニングから始まり、キャッチボール、バッティング、試合形式のバッティング、ノック、ベースランニング、長距離ランニングのフルコースで、夏場での終了時間は夜の八時頃になりました。

平日はこれを毎日こなし、日曜日は関東各地で練習試合や大会への参加で、休日もなく野球に明け暮れておりました。

私の中学生時代は、今とは違い練習中や試合中に水を飲んではいけない時代で、今考えればよく倒れずにやっていたと思います。80年代以前にスポーツをされていた方は思い出されることと思います。

さて、当時の調布シニアも、前にお話ししたリトルリーグと同じで、何度も日本一になっているチームで全国から注目されておりました。

よって、練習試合と言えども負けたら一大事で、負けると何時間も走らされ、本当に走るのが大嫌いになりました。なぜ、野球でこんなに走らなければいけないのかと、いつも思い悩んでおり、負けることの許されないチームに入ったことを、この時点では悔んでいました。

相手チームはニコニコ顔で試合をしており、伸び伸びと野球を楽しんでいるのに、私たちはエラーなどしたら大変で、チェンジでベンチに帰った瞬間に殴られ、二度目のエラーでは即交代という日々が続きました。

それでも中学二年の時にベンチ入りができ、北海道の全国大会では自身初めての日本一の経験をする事ができたことは、野球人生での嬉しい思い出になっています。

この喜びがあるために辛い日々を送ってきたのだと、この時に気づき来年自分たちの年も日本一になりたいと思い、頑張る決意を決めた中学二年生時代でした。

次号は、中学時代最後の年の思い出を書きたいと思います。 溝口 仁 (営業部)



1978年、調布リトルリーグの優勝で先輩にまじり横断幕のVの字を持つ筆者